

浄土

九月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三號發售開始可 (毎月一日發行)
昭和二十四年四月二十八日 遷移 (特別供養編輯部第三五二号)
昭和二十九年八月二十五日 印刷 昭和二十九年九月一日發行

第三十卷 第九号

ご法語で味う 念仏の真随

村瀬 秀雄 著

一枚起請文をめぐって

新書版二〇二頁・写真版二葉
価 1110円・(FR 110円)

目次……一枚起請文とは……觀念の念仏を辨す……

聖道はあり得ない……信仰の目標……本願念仏を

申す……ひらに信ずる……すべてを包含する……

二尊の前に誓う……只一向に念仏すべし……御道

訓にはげむ……二相承の合流……ご法語索引

信徒必携の奥義書

ご法語一〇〇句を収録

発行人

法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田町一の二一
振替 東京 八二一八七番

香りたかき浄土トラクト 一既刊一

選択集私解 大正大教授 竹中 信常著 新書版 価 120円
120 P 30円

真理のはなたば 大正大教授 佐藤 良智著 新書版 価 70円
太文 博 20円

信仰への導き 文 博 佐藤 賢順著 B 6 判 価 15円
16 P 10円

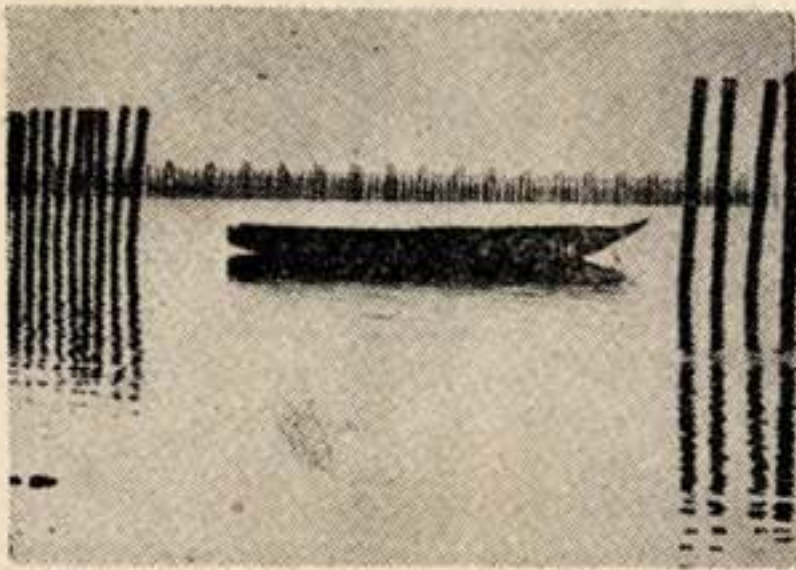
ご法語のしおり 葵ぐさ 村瀬 秀雄著 B 6 版 各冊 価 15円
16 P 10円

浄土宗のおしえ 大助 正教 大授 宮林 昭彦著 新書版 価 25円
20 P 10円

念仏をひろめるために心をそそぐ布教家に (多数申込みには)
真実の信仰をもとめている檀信徒の方々に (割引いたします)

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (262) 5944
振替 東京 82187



心ざしのなき者はゆるやかなるを
もなげかず。はげしからぬをもかな
します。

(法然上人御法語)

— 目 次 —

表紙 ミロク菩薩

随 想	長谷川実禪・高野幸子・守中裕幸	(2)
出船の行くえ	安 居 香 山	(4)
秋の彼岸の句	龍 淵 洞	(8)
突然変異した学会		(28)

近世文名録 上野法雄上人	高 橋 良 和	(10)
東南アジア旅行記	佐 藤 行 信	(12)
家康と登誉天室	鶴 田 湛 泉	(16)
茶の湯に生きた人々 千利休	林 左 馬 衛	(24)

紹 介 定義如来		(22)
御法語をいただく		(7)
教区だより		(27)
表紙の解説		(21)
岡 潔「風蘭」		(21)

続三部経の再発見	須 藤 隆 仙	(30)
----------------	---------	------

ことばについて

長谷川実禅

古来、人間は文化の進展に伴ないだんだんと数多く複雑な言葉を用い互いに相理解せんとこれつとめ、日常百般の用を済ますと同時に、その不便さを痛感するのは、あながち私一人では無いと思う。即ち言い換えれば「言葉」の便利さ重宝さを感じると同時に亦「言葉」の不便さをつくづくと感ずるものであります。禅に「不立文字」とあるは、この真理を指しているものでありましょうか。

釈尊が説法の後、聴衆の一人大伽葉に向って蓮華をひとひねりされて互いにニッコリされた謂ゆる「捻華微笑」の故事を今つくづくと思い起し、今更に天耳通（六神通の一）の尊さを想う。

私は、昨年亀井勝一郎先生の講演の折に「真の愛情は声なき声を理解する云々」との意味の事をお聞きして非常に感銘致しました。時折それを思い出して自分の周囲にも、そう

くずきり

高野 幸子

（香蘭女子高校教諭）

「どうしても食べて帰りたい。」という友人の言葉に誘われて、少々草臥れた足をもて余しながらも、四条通りを祇園下の方へ、一軒一軒確かめるような思いで歩いていった。だから「鍵善、くず切り」の夜目にも鮮やかな文字をみつけた時の嬉しさと、得意たらなかった。店内に入ると、柔らかい京都辯でくずきりはおしまいといわれたが、がっかりした一同の顔色に、遠来の客とみてとったか、十分程待つなら、特別に作ろうという。うすべりの縁台に腰を下し、磨きこんだ簞笥や、干菓子型の抜きなどを物珍しげに見廻して過ごした十分は、日頃のせっかちも何処えやらで愉しかった。そして、友人の言葉に誘われて来た癖に、ずっと昔から待っていたものに、もうすぐ会えるような心ときめきさえあった。懐紙に松葉、紅葉、菊の干菓子が載せられ、冷たいお茶が先ず運ばれて来て、見事な

信

守中 裕幸

（東京新宿・専念寺住職）

○
信じるということはこの文字をみてのとおりのことばを信じるということだが、信じられることばを、まったく聞く機会のない今日この頃のわびしさ。この弱い信をささえてくれる先達はどこに居られるのか。

○
法祖の又先師のことばをたよりにみずからの信を強くと思うのだが、さてみずからを真底まで納得させるみずからのことばを見出さなくては、いいかえれば人につたえることのできるみずからのことばが生れてこなくてはやはり自信ということもなりたない。

○
現代の社会生活の中で信のくらし——宗教生活——とはどういうかたちであろうか。持戒のくらしは論なし、元祖の御遺訓にももとより知者のふるまいをやめず空念仏も面映く銭

云う方々が、又自分がそういう人になれたらば……どんなに倖せ（心が満足）な事であるかと衷心より想うものです。釈尊は八正道に「正語」を説かれていますが、今の世の中ではこの当り前の事が如何に至難な事になっている事でしょう。

仏教では身口意三業の内外相応を説くが聖者にあらざる私達凡人、人間の醜い心の模様その儘を内外一致といって身業、口業の行動に現わしたら一体どうなるか？は、おのずから理明かにして、賢明なる皆様にはお解りの事と思います。今一つ仏教では貪瞋痴の三毒煩惱を断てと教えていますが、勿論これはそうありたいものですが、どんな不合理な目にあわされても尚、且つ腹を立てないでニコニコしているのは超人はともかく、なかなか出来ない。第一現代に生きて行くには、そんな事では、踏んだり蹴ったりされる懸念なきにしもあらずです。ふとこんな事を思い起し幼少より薫習された私の心の中の仏教は、今も尚、脈々として私の心の中に生きています。が、信ずるが故のこの苦しみが生じます。

心配りに、ああ、京都だな。と思った。やがて、待望のくずきりである。朱塗りのけんどの岡持の蓋をはずすと、箸が斜めにたてかけてあり漆塗りの二重の容器が入っている。

上の重はとろりとした黒蜜、下の重は、一瞬、目をみはった。大きなぶっかき氷が岩のように、その間にゆらめく細いくずが、白しぶきの流れのように思えた。箸ですくって蜜につけてするっと口に運ぶと、歯にしみる冷たさであった。くずを蜜に、つけて食べるなど、古くから庶民の中で育ってきた味であるに、こんなに美しい菓子に、見事変形させた鍵善のあるじが心憎い。くずきを堪能できた旅の一夜は、真に満足であったし、帰京すると、会う人毎にその夜の感激を語ったものである。以後京都を訪れる楽しみが一つふえたが、あの店内の縁台で食べた感激は、程遠くなったし、春から九月までの菓子と聞いていたのに、客の懇望で年中作っていると、いささか、がっかりしている。季節感の溢れたくずきを讃える余りの、身勝手ない分であろうか。

になることにはいそいそと。しかし、寝苦しい真夏の夜枕につかず転々としてひそかに苦痛にみちた念仏をのみこむ。

○
翹望ということばがあるが、文字の上でなく、目前に唯一人の念仏の行者、先人のテープ・レコーダーでなく、今のみずからのことばで、真の苦悩と真のすくいをつぶやいてくれる現代的な念仏の実践者はなきか。

○
世界はものすこしいきおいですすんで行くのに、古典的な宗教生活の中にひそやかな安位を求めることはもはやできない。この自然との調和をつきやぶって変ろうとしている世の中をみて何等かの意味をさぐろうとすることも知者のふるまいなのでしょうか。

○
この素朴な私のねがいを、かつ然ときりひらくようにこたえてくれることば、否その人をさがしに私はこれから歩かねばならないと真剣に思う。

出船の行くえ

—— 彼岸におもう ——

安居香山

(大正大学幹事)

今宵出船が おなごりおしや

くらい波間に 雪が降る

やや哀調を帯びたこの歌は、わびしい港の燈とともに、切り離すことのできないメロディである。時にはマドロスの哀欲をそそり、時には恋人たちの涙をさそう。

且つて、戦時中にあつては、戦陣に立つものと、銃後に残るものとが、幾度かこの哀調の中で骨肉の情を引き裂かれた。一度、この哀調がかなでられ、五色のテープが切られたからには、父子夫婦といえども、再会は期し得なかった。そ

して、多くの人々が、この哀調を最後に、恩愛のちぎりを絶ち切られ、不帰の客として、海の彼方に、肉身たちを送り出してしまった。この哀調の中には、このようなろいの影が宿っている。

ところが、この出船の歌が、最近、別な感懷を伴なって再びわれわれの前にあらわれてくることとなった。それは、雑誌浄土の七月おぼん号でも特集された、岸本英夫博士の逝去に関連してのそれであつた。

いうまでもなく、岸本博士は、この一月、十年にわたる痛との戦いに終止符を打たれ、終に不帰の客となられたのであるが、その間、自ら痛と知りつつ、これを精神的肉体的に克



(故岸本英夫博士)

服し、精神的には、死を超克し、肉体的には数々の偉業を為しとげられたことは、未だ耳新しいことである。これは平凡な凡人の為しうる所ではない。まことに、博士は非

凡で強靱な、人格と理性の持主であつたのである。

博士は、死は生命に対する別れの時であると考えられた。

私は、生命をよく生きるという立場から、死は、生命に対する「別れの時」と考えるようになった。立派に最後の別れができるように、平生から、心の準備を怠らないように努めるのである。

このように、博士は「わが生死観」の中で、述べておられる。博士にとっては、普通の「さよさら」と言つて別れる別れは、又会うことのできる別れであるが、死は、再び会うことのできない「別れの時」であるとされた。それは、単なる

理解でなく、体認であつた。痛を宣告された博士が、死と対決して始めてできた体認の語であつたのである。そして、このような体認は、凡夫の為し得るところでない所に、博士の非凡さがあつたと言える。

この博士の愛唱歌の中に、実は出船の歌があつたのである。果して、何時頃からこれを愛唱されておつたのか知らないが、家族の方や、或は学生達との会合の席上で、よくこの歌を歌われたという。そんなわけで、お通夜の時も、図書館での葬儀の時も、この愛唱歌が霊前に捧げられたのであつた。

思うに、博士の生死観とこの出船とは不即不離なものであつたに違いない。そこには常に、生命に対する「別れの時」が自覚され、反省されていたに違いない。単なる哀調に心惹かれていたのではなく、出船の歌を歌う中に、博士の死に対する毅然たる態度が示されていたに違いない。そして、いよいよ、生命に対する、「別れの時」が来て、出船するときには、あの哀調と共にではなしに、従容として静かに死に趣く姿が、この歌の中に予想されていたに違いない。

われわれは、船が出るとき、或る哀感にさそわれるが、し

かし、又この船が帰り来るであろうときの歓喜をも予想している。しかし、博士の出船は、一度び出た時は、帰って来ない決定的な出船であったのである。しかし、その決定的な出船に対して、従容としてこれに乗るだけの心の準備を、平生から心がけられたのであった。そして、その通り、実践されたのであった。

仏の教えの中に、生者必滅、会者定離ということがある。

生あるものは滅し、会うものは必ず別れるという、自然の理法である。そして、この理法を早く悟得することが、重要な仏道の課題とされている。しかし、そこが凡夫のあさましさというか、なかなか悟得できない。「別れの時」が来たその時でさえ、これを悟得することは難しい。しかし、博士は已に早く、「別れの時」の心の準備をされた。超宗教とされた博士ではあったがその意味では、已に仏道を悟得されていたと言っても過言でない。博士の思慮の中には、もっと深いものがあったのであろうが、つきつめてみると、こうしたことの悟得が、その根幹をなしていたのではないであらうか。

已に博士は出船の人となって、此岸を離れられた。まさしく、「別れの時」に会った人となられた。しかし、確かに此の世に残されたわれわれからすれば、再び帰り来ない出船で

はあったが、博士自らの出船は、新しい門出でもあったであらう。そこには、彼岸がある筈である。果して博士の出船はどんな彼岸に向って航海しつづけておられるのであろうか。彼岸は、涅槃浄土である。従容として出船の人となられた博士は、一途この彼岸に向われたに違いない。それにしても、博士の出船が、単に帰り来ぬ船として、彼岸に向ったままであるのであろうか。再び博士の「わが生死観」をひもとくとき、出船された博士の教えが、今ここに生きつつあるわれわれの胸に、数々の教えと、問題を、課しつつあることを感ぜずにはいられない。彼岸を迎えるにあたり、この教えと問題を、私自身のものとして、かみしめてみたいと思う。

秋彼岸の施本 仏教の生活

仏教の生活は、心あたたまる話題と、明るく、生きた写真で一家そろってたのしみつつ、信仰の芽ばえとなる新しい時代の施本です。

一家に一冊お寺で頂く心の糧

A 5 16頁・定価20円・50部以上
一部 12 円 ・見本乞切手30円

東京都文京区湯島三組町 13

仏教書肆 中山書房出版部

電話 (831) 8494 振替東京 180328

ご法語をいただく

浄土をねがへどもはげしからず、念仏をすれども心のゆるやかなる事をなげくは、往生の心ざしのなきにはあらず。心ざしのなき者はゆるやかなるをもなげかず。はげしからぬをかなしみます。いそぐみちにはあしのをそきをなげく。いそがざるみちにはこれをなげかざるがごとし。

(十二個条問答)

反省と懺悔とは念仏信仰の基礎でありますもし深く反省することのない人が、お念仏を唱えたとしても、それは法然上人の説かれた念仏信仰ではありません。

「決定してふかく信ぜよ、自身は現に是罪惡生死の凡夫也……と」のお詞を片時も忘れてはなりません。

ところが現実に出会う人々がいかに反省を欠いているかは驚くばかりであります。世界の冷戦のことはいわなくとも、どこの会社、どこの事務所に行ってみても、そこには大なり小なりの対立と抗争が渦を巻き、疑惑と不

信が満ちています。人々の心は傲慢と侮蔑に苛まれ、自分も他人も傷つけています。

こうした姿に日日接してみますと、ほんとの念仏信仰が案外にまでこの世に払底していることを知るのであります。お念仏を口で唱えることはまことに易しいことですが、信仰に生きようとするには際限のない精進が要求されます。

ある時ある人が法然上人にこう質ねました「往生をねがいお念仏を唱えるのに、どうも我ながら十分ではありません。こんなことでは往生をあきらめねばならぬでしょうか」

この質問に対するお答えが、ここに掲げたご法語であります。

「心の急く時には、汽車も自動車も間意く感じます。また散歩をしている時には、ゆっくり歩いていても何んとも感じません。それと同じ様にお念仏を唱えていて、こんなことでは往生が難しいのではないかと思われることは、信仰心のある証であります。信仰心のない人ならば、お念仏を唱えてみて、慢然と満足しています。お念仏の唱え方がまだ足らぬと思い、往生を志すことの真剣さが十分で

ないと嘆く気持のあることは、やがては念仏信仰に入ってゆく道しるべであります」

そして更に次のようにさとされました。

「このめばをのづから発心すと申す事もあれば、漸々に増進してからなす往生すべし。日ごろ十惡五逆をつくれるものも、臨終にはじめて善知識にあひて往生する事あり。いはんや往生をねがひ、念仏を申してわが心のはげしからぬ事をなげかむ人をば、仏もあはれみ菩薩もまもりて、障りをのぞき、知識にあひて、往生をうべき也」

お念仏を唱える事はよいこととあります。このよいことを行っていないながら、もっと十分にもっと真剣にと反省すれば、必ずや仏さま菩薩さまのお守りがあるのです。そうなれば支障をとり除いて目的が達せられます。

反省と懺悔は念仏信仰の基礎であります。それと同時に念仏信仰の日に欠かすことのできない生活態度であります。従ってもし傲慢の心が起れば、即刻惡魔の仲間になるのだといわれたお詞と同じであります。

(村瀬 秀雄)

秋の彼岸の句

龍淵洞

○
俳句では、彼岸と云えば春の彼岸をさし、秋のそれはとくに秋の彼岸、又は後の彼岸と呼んで区別している。

春分と秋分とを中日として、その前後各三日、すなわち七日間を春、秋の彼岸とよんでいる。

秋分は春分と同様、昼夜の時間が等しくなる日で、この日を境に夜の時間が昼より長くなってゆく。

菩提樹に雲浮く秋の彼岸かな
(山崎 秋溪)

○
いつの頃から云われたか知らないが、古くからことわざに『暑さ寒さも彼岸まで』の言葉の様に、長かった残暑も薄らぎ、にわかには秋冷をおぼえて来る。

この氣候のよい時に彼岸会と称して、春の彼岸と同様に仏教の諸行事が行なわれ、一般では墓参りなどが行なわれる。

大寺の彼岸詣りやほつほつと
(高浜 虚子)

彼岸とは梵語の「波羅密多」の訳語で、つまり「到彼岸」の略で煩惱に満ちた此岸を離れて涅槃の世界に到達するのが彼岸の行事の趣意。

太陽が真西に沈むので弥陀の在所をこれによって正しく衆生に示し、往生の本願をとげさせるための仏事だと云うことになっている。

だが、これは本来の仏教ではなく、日本人に一般的であった太陽崇拜に基くものであるらしく、仏教に縁のない固有信仰にもとづく行事が多い。

結局日本では平安初期に彼岸会が設けられたのが最も古く、それが一般にまでひろがり、中日または彼岸の一日を選んで、日迎え、日送りと云って、午前中は東に向かって歩き、午後は西に向って歩く「日の供」と云う行事がいまだに中国地方の山村では伝承されているらしい。

○
入日拝む目も衰へし彼岸かな

(燕郎)

春分、秋分の日、大阪の四天王寺では、西門が極樂の東門に通ずるとして、日想觀を行じ、海中にくるめき沈む日を押する。入日をおがむ習俗が来迎仏を拝する信仰に転化する姿を見せている。

○

南無秋の彼岸の入日赤々と

(宮部寸七翁)

少年の日の思出。まっ赤な大きな太陽が、水平線に沈んでゆく姿、半分沈んでまた飛び上る様にして再び空と海とをまっ赤に染めて沈んだ太陽、あんなにも美しくまた神々しい入日を見たことがない。

土地の人たちは、彼岸の中日の入日は数を数えて入ると云っている。

春の彼岸か秋の彼岸か、はっきりした記憶はないが十五六歳頃の彼岸の中日の入日だった。

北の富士山が落日に映えて赤く、葛飾北斎の赤富士を思わせる美しさ、一年中に一度か二度の美しさだ。

真西に入る落日はお彼岸の中日だけ、然も駿河湾の入口はせまい。その狭い水平線への落日はほんの僅の短い期間だけ。

ましてその頃は天候定まらず、雨も多いし、雲も多い。水平線の晴れた日に、まっ赤な太陽のくるめいて入る姿を見る

なんて、ほんとうに西方にお浄土のあるのを思わせる姿だ、子供心にも手を合せたくなる光景でもあった。

○

仮堂のまゝまた秋の彼岸かな

(河原 白朝)

戦災で焼けて何歳、伽藍が敵襲で一夜に焼けてしまい、終戦後、涙と共に焼跡をほとんど自分の手で整理し、四苦八苦の上、どうやら仮堂を建てたが、次第に手ぜまになり四五年して拡張改造はしたものの、さて再建となると中中手がつけられない。私の寺もなんとかしなければならぬと思う。計画だけは出来ても金繰はつかない。さてどうしたらよいのか、お檀家の再起をまっている間に時期は失われてゆく。売る寺の財産もない。

来る年も、また来る年も仮堂で過さなければならぬ。これで何度春、秋の彼岸を送り迎えたことだろう。

今年も秋の彼岸が過ぎてしまう。

○

近頃は東京では曼珠沙華(彼岸花)も咲かなくなった。秋の彼岸頃きまって花を開いた曼珠沙華。曼珠沙華とは梵語で「赤い花」と云う意味だとか。

露の香にしんじつ赤き曼珠沙華

(飯田 蛇笏)

彼岸花ふんだんに咲き家貧し

(二階堂支草)

上人 雄法 野上

高橋良和

(中外日報取締役)

何回か前に原田靈道先生のことを書いたがその同じ山口の人に上野法雄上人がある。

古来山口は多士彩々というのか中央に出ている人が多いらしいがその一人にこの上野上人がある。

上野上人は山口県仙崎町、今の長門市仙崎の円宝寺の住職であるが、生れは京都の百万遍本山の山内であるから、縁はどこにころがつているかわからないものである。

師籍が京都にあった関係もあるし、また義弟が大正大学の教授をしていたし、御本人は

山口教区の教務所長ということであつたから、絶えず東京と京都を往復してにぎにぎしい、話題をふりまいた思出の人である。

年もちがっていたが、わたしのことをいつも「よしかず」と呼びすでにして、京都駅につくと電話をしてきたし、かえるときも必ずといってよいほど連絡があつたものである。

この上人は酒もかなり強くて愛酒家の方であつたけれど大体においてふんいきのすきな人であつて、いつもあちらこちらと梯子をやつたものである。

「もう一つ行こう、付き会え」となかなか若いころがあつて、たまに京都へくると夜中すぎまで引っぱりまわされた経験は二度や三度ではなかつたのである。

原田靈道先生もよく家政学園の大島徹水僧正のところに来ていたが、この上野上人もいつも家政学園にやってきましたのである。というのも大島僧正と共にわたしの義兄である伊藤典孝と無二の親友でもあつたからで、原田先生、上野上人、それに義兄の伊藤とすこしの友人を加えての会合がいつももたれていたようである。

この上野上人ときたら如何なるときも怒つたときがないので、どんなときでも、また自分より目下の人であつても、全く丁寧にして行き届いたことばで取扱つたからこそ上野上

人に関する限り地元の山口教区でも褒めこそすれ、批判がましいことは一つもなかったのである。

この上人、布教師になるのには弁舌が爽やかな方ではなかったし、といって政治家になるのにはまじめすぎて掛引きなど出来る人ではなかった関係から、教務所長という一事務官と総本山知恩院の協議員という職で終ったが、その人間味は実際今思い出しても涙がこぼれるほどである。

戦争が苛烈になってきて都会は食うものにもこと欠くことになってきた頃は、いつでも仙崎から魚を送ってくれたものである。もちろんわたしのところだけではないので、友人の家にはことごとく何かの食料を送ってくれたらしく、この上野上人のころのこともったおくりものに、京都や東京の友人たちは物資不足の戦時中も油気を絶えることなく過ごしたといえるのである。

「おい付き合え」とあまり口を大きく開かないでブツブツと小言をいうような声で今日もわたしにいうのである。付き合うけれど、何を付き合うの。

いや、今日はうまいものをうんと食べられるところへつれてゆけ。

いつもなら呑むところなのに今日は食べるところへつれてゆけと宗旨ちがいのことばである。

うん　じゃつれて行きますかな。

食べるのならこちらが本家と京都でも名高い上等のオイル焼きという店に入り、上野上人は、

よし、きょうはうんと食べ、お前が食べるんやぞ、どうやら戦争がはげしくなってきたてお前も戦争に行かになんやろ、それでうまいものをうんとお前に食わしたるのんや。

といって、オイル焼きの上等を食べさしてもらったのは昭和十八年のそれも七月に入ってからである。

探がしもとめたオイル焼きでわたしを送ってくれたのが最後となってそれから十数日すぎてわたしは見事出征したのであるが、あの夜鴨川のせせらぎを聞いて食ったオイル焼きのうまさ上野上人のま心が今もなお思出の一つである。

誠実そのもの、温容と後輩をいたわるあたたかい心には無条件で頭が下るのである。



東南アジア旅行記 (4)

佐藤行信

(大正大学講師)

十一月二十一日

昨晩は早く寝てしまったため、朝六時には起き、汽車の窓からすがすがしい朝の田園風景をしばらく眺めていた。それから下車準備をし、丁度六時半予定通り正確にガヤ駅に着した。この駅は割合大きな駅であった。列車がホームにつくと赤いシャツに赤のターバンをまいたポーターが、皆素足であるが、我々の荷物をどんどんホームに運び降ろした。その間しばらくホームで眺めていたが、我々の乗って来た車輛は上等で、他の車輛は全くお話しにならない。その上大勢の人が乗っており、はたしてこの人等は、昨晩寝られたの

であろうかと案じた。丁度ガヤ駅では日本の駅の売子のように、お茶とか果物等ホームで売り歩いていて、我々が眺めているとホームにいた乞食が、バクシーシー（金をくれ）とやって来る。現在日本では乞食と云うものをほとんどみかけなくなったが、印度はいたるところにいる。そのうち荷物が駅長室までポーターにより運び込まれた。自動車の仕度が出来る間しばらく駅長室で休んでいた。まもなく車の仕度が出来たが、小型のため荷物は車の屋根に積み、一台に三人ずつ分乗している。よいよブッダガヤに向って出発した。乗った車はインド国産のアンバサダーと云う車であったが、日本の乗用車に比べると、まだまだ

である。しかしブッダガヤまでの道路は、英國の支配下の頃の軍用道路であったのである。うかよく舗装されていた。また途中の景色は、印度の拡大な原野の中を両側に街路樹の植えてある道を通るため気持がよかった。約一時間ばかりで、我々の目的地ブッダガヤの大塔がみえて来た。この大塔がみえた瞬間、よいよ釈尊正覚の地に来たのだと云う感激が湧いて来た。我々はこの大塔の見える景色のよい場所にある、ツーリストバンガローに車を止めた。このツーリストバンガローは、ほとんど政府管理でやっている。ここで荷物を降ろし、顔を洗って一休みし朝食とした。しかしもうここまで来ると、コカコーラ等も売っておらず、喉がかわいても熱い紅茶であるが、それも食事の時か皆で一緒に飲むときしかない。しかし果物や野菜類は割合よく食卓に出ていた。トマト等も南方のため大きい。肥料の関係か、あまり味はよくない。又パン等も、この頃のように食生活が向上している日本人には、これが日本であつたら食べられないであろう。しかしそんな事云っていたら、これから二日間食べずに過さねばならな

いし、この位のことは、覚悟のうえで来ているのだからと食べてしまったが、いままでも都会のホテルばかりであったため、一行の皆さんこたえたようである。朝食のあと一休みし、十時頃からいよいよブッダガヤに参詣した。ここも政府が管理しているため、美しく清潔にしている。まず最初に釈尊が三十五才で覺をひらかれた正覺の場所、菩提樹下の金剛座の前で一行は皆一緒にお線香をあげ読経した。このブッダガヤは、我々の訪れた最初の仏跡であったため小生は一番感激した。その後大塔の中に入って仏様をお詣りした。この大塔はアシヨカ王によって建てられ、その後仏教徒によって何度も修理されたものである。高さは一七〇フィートあるそうである。塔の周囲には多数の凹みがあり、中に仏像が納められている。その後、大塔の裏にあるまことに美しい蓮の池を見学した。もう十時を過ぎると相当な熱さであるが、しかしこの場所では熱いことなど忘れていた。次にこのブッダガヤをお護りするため、チベットやタイから仏教徒が来ており、各々そのお国ぶりを示した寺院を建てている。チベット及びタイ

の寺院をお詣りした。なお日本の寺院もその内に出来るとの事である。そして次に午前中最後の行程として、ブッダガヤにある博物館を見学し、バンガローに帰って昼食となった。又この昼食に出たカレーライスの辛い事、口がまがってしまうのではないかと思う程であった。これを全部食べたなら、喉がかわいてとてゑたまらんといい、またトマトとパンを食べ昼食をすませた。食後の一休みがあった後、午前中乗って来た車に分乗して、ラージギールに向って出発した。これは、約四時間程乗りつめの行程であった。発車してしばらくすると、尼蓮禪河がみえ出した。その向こうにある山が前正覺山である。この尼蓮禪河はガンジスの一支流である。尼蓮禪河は、釈尊は六年ものながい間苦行をつづけられた。しかし悟りへの道は一向にみえなかった。かえってこうした肉体の酷使衰弱は精神上にもかえってマイナスになられた。結局苦行によっては覺りに到ることは不可能であると気づかれ、そこでこの尼蓮禪河の清流で沐浴され、やっと思いで岸に上られ菩提樹下で覺られたのである。この尼蓮禪河を横にみ

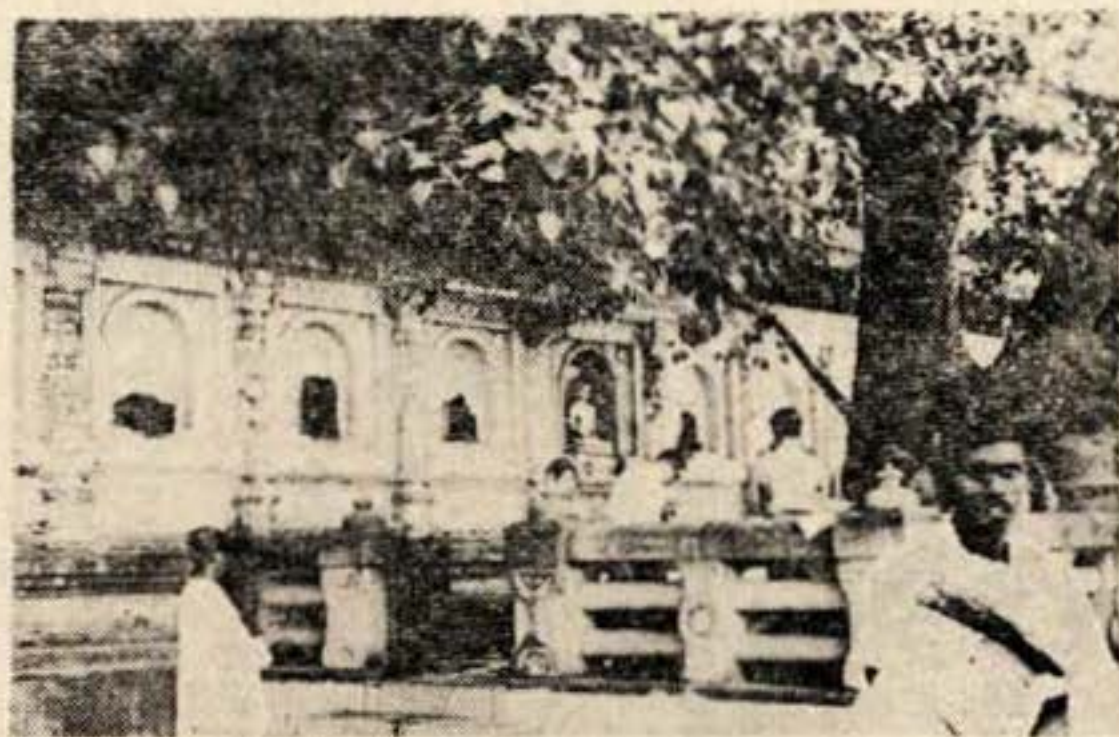
ながらラージギールに向った。途中ずいぶんきたない部落を通った、途中の或る部落で、我々にオレンヂを案内人が買ってくれた。しかしその売っている店の非衛生なところをみたから始めは食べる氣持になれなかった。しかしだんだん喉もかわき、水が飲めないため、しかたなくアルコールの手ふきで、まわりをきれいにふいて食べた。外見より味は割合とよいオレンヂであった。ラーヂギール迄の景色は、部落さえ過ぎれば、拡大な原野で



(ブッダガヤの大塔)

たまに象に人が乗っているのをみかけたり、牛の群れをみかけたりなかなかのどかな風景であった。しかし人も牛も栄養が悪いのか、弱々しい感じがする。午後六時頃、ラージギールに到着した。今晚はこのバンガローに泊るわけである。このバンガローはあまり清潔ではなかった。バンガローに到着すると何時ものように部屋割があり、小生は何時もコンビとなっている鵜飼先生と一緒にいる。このバンガローは水が満足に出ず、一日中汗をかいたが風呂にも入れず、また水そのものが濁っていて、その点快的とは云えなかった。又部屋にはヤモリまでいるしまつ。それでもここに寝る以外ないのである。ここには日本山妙法寺のお寺があり八木天正と云う日本人のお坊さんが堂守をしている。夕食前その八木さんが我々に会いに来てくれた。この地に一人でもう二年もいるとの事であったが、ここに住んでいる努力だけでも大したものだと感心した。ここの夕食も本日の昼食同様であまり上等ではないが、食わずにいては体がもたない。なるべく野菜、果物を主にあとパンにあまりよいバターではないがぬって食べた。

夕食後はバンガローのベランダに出て涼んだが、夜はなかなか涼しくなりその点助かった。夜も八木さんが来て下さり、明日靈鷲山と一緒に御案内下さるとのことであった。こ



(ブツダガヤの菩提樹下・金剛座)

のバンガローは電気もあまり明るくなく、本を読んでも眼を悪くしそうなので夜は又、早々と寝てしまった。しかし今になるとこのラーチギール王舎城中印度摩揭陀国上代の首府

に一泊出来たことは良い思い出であった。

十一月二十二日

本日は六時に起床した。このところ毎晩夜早く寝るため割合早く起きられる。しかし同室の鵜飼先生は何時も小生よりもっと早く起きておられる。まず顔を洗ったが水が悪いため顔がぬるぬるする感じである。朝食前に部屋を出てぶらぶらしていると、我々一行の案内をしてくれる印度人の旅行社の人が、太陽に向って礼拝をしている。たぶん印度教の朝の礼拝であろう。七時半頃朝食をすませ最初八時頃歩いて竹林精舎跡を見学した。竹林精舎とは仏成道の初年、竹林に精舎を建立したもので、これは、摩揭陀国を支配したピンバシヤラ王の施主で建てられた寺の旧跡だが、どうもこれは場所が違うように思った。どうやら、公園化するためこの地点だったと推定して名づけたところのように思う。それから車で靈鷲山のふもとまで行った。ここから八木さんの先導で、登り始めた。この密林の中に石山の石を割って、舗装してあるよい道が出来ている。まったく仏陀の聖地はどこ

もきれいに管理されておるのに感心させられた。上って行く途中、道のわきに菩提樹や、その他の老木が根が張って大きな枝を交錯させている。ところどころ岩影がみえ頂上だけが、幾々として巨大な鷲を思わせるものがある。登るのに約二十分程がかったが、この八木さんは毎日登っておられるとうかがった。

頂上の平地は煉瓦で周囲が築かれており、説法の旧跡であるから、仏陀が教を説かれた高い座がある。ここにローソクを立て線香をあげて我々一行で礼拝した。頂上に上り、ここで大無量寿経や法華経等が説かれたと思いい、そこに今、小生が来ておると思うと感慨無量なものがある。それから山をおりて再び車に乗って今度はビンバシヤ王が皇子アジヤセのため幽閉された牢獄に案内された。中は丁度日本の戦争中の防空壕みたいなものであるが、無量寿経、観無量寿経を經典としている我々には感無量なところであった。次に温泉をみた。この温泉は、伝説で釈迦も入られたと云うことになっており、現在は印度教徒のもので、像も仏像はなかった。この温泉に入るのも印度教の宗教行事であるとの話し

であった。これでラーチギールの見学はすべて終り、バンガローに帰って昼食をとり午後にはまた車でナーランダを見学しパトナに向った。ま一時ず間程で、ナーランダの現在新し



(ラーチギール霊鷲山々頂)

く出来たナーランダ大学に到着した。ここには各国の仏教研究者が集って勉強している。日本からも二名留学している。しかし当日は日本の留学僧は不在であった。いよいよ古代

のナーランダ大学の旧跡に行った。ここも非常に綺麗に発掘され、芝生が植えられよく手入れされた一大公園と云った感じである。我々には玄奘三蔵が留学したところであり、親しみ深いところである。昔の大講堂の跡、各僧院の跡や浴場の跡まで綺麗に発掘整理されて往時をしのぶに十分である。丁度今日は印度教のお祭りだそうで、この辺大勢の人が出ており、女の人は色とりどりのサリーを身につけ、頭の上に籠や包みをのせて歩いてる人が多かった。次にナーランダの博物館を見学した。ラーチギールでもそうであったが、建物は小さいが美術品は豊富で短時間ではとてもみきれない。そのあとこのナーランダにあるレストハウスで一休みし、紅茶を飲んで午後三時頃ナーランダをあとにパトナに向った。宏大な印度の平野を約五時間つづばしり、午後八時にパトナに到着した。これからここで日印親善協会の歓迎会がある。小生のような若い者は別として、一行の御老体の皆様には、本当にこの強行軍さぞかしお疲れになったことと思う。

家康と登誉天室（一）

鶴田湛泉

一

駿河、遠江、三河の三カ国を領有し、甲斐の武田に好誼を通じ、相州小田原の北条氏とも和を結んで雄威を関東に輝かせていた駿河御所の主、今川治部義元は、機あれば尾張の織田信長を打倒して京都へ押し上ろうとしていた。一方、美濃、伊勢、近江等を切り平げて武名近隣を震わしていた尾張清洲の城主織田信長は、今川を攻め滅して天下を統一しようとして虎視眈々と謀を回らしていた。既に両雄並び立たぬ時機に来ていて、ここに竜虎相争わんとする戦雲をはらんでいた。

義元が数万の大軍を率いて尾州へ発向しようとしている動勢を探知していた信長は、鳴海近辺の数カ所の要所に、新たに砦を構え、丸根城には佐久間大学秀盛、鷺津城には飯尾近江守致公をそれぞれ守将として敵に備えた。これに対して義元は、鳴海城を岡部五良兵衛長教、尾州の大高城には鷲殿長助、笠寺城に葛山備中守勝吉等を守将として守らしめて信長への押えとしていた。

兵を動かした信長は、今川の尾州への楔のような形となっている大高城を先ず囲ましめた。大高は尾州の関塞で、駿河に趣く咽喉でもあったからである。敵中に挟まれて通路を

遮断されてしまった大高城の兵糧は日に日に欠乏して、このままの状態では城を守り抜くことは不可能であると、兵糧の補給をしきりに駿府の義元へ訴えて来ていた。

これが義元の頭痛の種であった。

義元としてはいかなる犠牲を払っても、城中へ一日も早く送り届けたいと思うのは当然であった。

●重臣を集めて評議がつづけられたが、既に敵勢に囲まれた大高城は敵地にある上、信長も近日中に加勢の兵を率いて来るという噂におびえてか、さすがの老将等も、兵糧入は甚だおぼつかない事と思って、某がこの役目果

しますると請ける者がなかった。

万一、途中で兵糧を敵に奪われたら味方の大損であることはわかり切ったことであるが、兵糧を届けなければ城を持ちこたえる事が出来ないことも明白であった。

事の重大さに、重臣等も互に顔を見合せて尻込の容子にたまりかねたのか義元は、

「その方達がなし得ぬとあれば、岡崎蔵人はいかがであろう。彼は智慮は凡ではないし、家臣にも武功を積んだ老練なるものも多いこと故、この役、命じたらいかであろう」と、自分の考を述べた。

重臣等は、いずれも己が身に大役を引受けることを躊躇していた際だったので、

「殿の仰せご尤もにございまする」

ほっとした形で、異口同音に讃意を示した徳川家康が、家康と名乗ったのは、彼が二十三歳の時で、その頃は岡崎蔵人元康と号していた。十六歳の時、義元の妹の夫、関口刑部小輔親永の娘を妻とした。築山の御方殿である。義元が家康を起用しようと思ったのは、血縁だけではなく家康には武略があることを信じたからであった。

今川の麾下にあった家康は、昨永祿元年、

寺部城攻めを命じられると、一たん岡崎へ帰り兵を率いて寺部を攻め、外廓を撃ち破ると城を強襲し、火を三の丸、二の丸に放って敵の首百余級を挙げた。城主、鈴木日向守はやむなく城下に出て降った。駿河に凱旋すると、みなその勇に感嘆したが、とりわけ義元は、家康を目を細めて賞し、名剣一振を与え虎將を得たとよろこんだという。これが家康の初陣で十七歳の時であった。

家康が義元に招かれて、思いもよらぬ兵糧入の大役を命じられると、十八才の彼は眉宇を輝かせて、

「これほどの大事を、若年のそれがしならではとの仰せ承りますることは、面目これ以上はございませぬ。今後人にかない難しと申さるる事なればそれがし若年役に幾度でも相勤め申しまする」

英気に溢れる声はずませて引き受けたのであった。

「さようか、その言葉が気に入ったぞ」

義元のはほには、会心の笑がただよっていた。

義元の老臣等は、家康の言葉を伝えきくと

「元康め、未だ乳臭い少年の身でありながら、御前に向っての広言は。全く身の程を知らぬうつけ者よ」

たかが壮言だけでは齒が立つまい。何が出るものかと舌打ちして詠る者がいた。

けれども、一方、

「弱年なれども、さすがに御前の姪の婿殿、英気あふれる御氣性、この人こそ、必ず兵糧を無事に運び入れるであろう」

天晴れ器量のある侮り難い若殿、心からそう信じてはめる者もいた。こんな風に、家康に対する家中の評判はますますであった。

二

己が館に帰った家康は、鳥井四郎左衛門忠広、石川十郎左衛門知綱、内藤甚五左衛門義教、杉浦藤次郎時勝、内藤左衛門正成等を招いて、義元から大高城兵糧入れを依頼されたことを仔細に告げると、

「汝等、急ぎ彼地へ馳せ行き、敵の状勢、地形の難易、道の広狭などよく見定めて参れ」と命じた。彼等は、直ちに馬を駆って馳せ

行つた。

彼等が辞し去ると入れ違いに、杉浦五郎が入つて来た。彼の顔を見ると家康は、

「おお、杉浦か、そちも急ぎ大高城を見て参れ！」

と言葉数少なに、重ねて彼に命じた。

やがて先に敵状の視察に行った鳥井、石川等が馳せ戻つて、

「早く織田勢、道筋に多数陣しております故、兵糧入のこと思ひもよりませぬ。強いて

行いますれば、途中にて敵に襲われ味方甚だ難渋いたしますのみか、小荷駄も奪われる恐れがございまする」

甚だ悲観的な報告であつたが、家康は、彼等の言葉に、黙然として思案に耽つてゐるだけである。

そこへ

「殿、只今立ち帰つて参りました」

と杉浦が戻つて来た。彼の報告は、先きとは全く正反對で、

「殿、大高城に兵糧入れのこと、仔細はございませぬ」

自信にあふれた答えであつた。

「何を見定めて、さよう申すか」

「されば殿、敵の旗色を伺いますれば、たとい陣を山上に備えていまして、山より麓へ兵をくり出して敵を待つのが当然でございます。而るに、山上に陣を引き上げる容子を見ますと、これは戦を待ち受けようとする敵ではありませぬ。幸い道路も広うございませれば、小荷駄を中央にして、前後左右より取り囲んで段々に押し通れば、何の仔細もないことと考えまする」

「ウム、左様か、兵糧入れのこと、見事成就して見せるぞ」

昂然と云い放つ家康の胸には、既に方策が十分立つたものらしい。

この時立てた家康の兵糧輸送計画は緻密を極めていた。

先ず小荷駄を三段の備にした。一の小荷駄は百五十頭とし、一駄に三俵ずつ都合、米四百五十俵、馬一頭に口取の軽卒二人をつけることとした。

小荷駄を守る先手の大将平岩七之助は、遊軍の兵百五十騎を率い、二番手は百騎を率いて礪原七郎右衛門が守り、三番手は酒井雅楽

助が百騎を率い、殿は本多平八が百五十騎を率いて守り、小荷駄と遊兵の間隔はそれぞれ半町を保たしめた。

小荷駄を中央としてその左右には、更に弓鉄砲を組合せた五十騎を一隊とした精兵を、大久保五良右衛門、鳥井四郎左衛門、大原左近右衛門、杉浦八郎五郎、石川十郎左衛門、成瀬八郎等にそれぞれ付けて守らせ、都合千百人の輸送隊である。

途中の敵の襲撃にそなえて、これだけの警護をせねばならぬほど、至難な兵糧入であつた。

而も、敵襲に逢つたいかなる場合でも、小荷駄だけは必ず城に入れる臨機応変の明細な策戦が、家康から授けられてあつた。

この時、今川方が大高城へ兵糧を納れようとする気配が見えたら、途中に兵を出し遮り留め軽く一ヒネりくれた上、兵糧を奪つてやろうと、こんな計画を、鷲津、丸根の両城の守将、佐久間大学、飯尾近江守の間で示し合せてあつたのであつた。

この事を知つてか知らないでか、家康は一手の兵を遣して寺部に押しよさしめた。彼等

は城の木戸を破って火を放って、さっと引き上げてしまった。

又一方、梅坪に押しよせた家康勢は、城兵と烈しく攻め戦ったが、終に二の丸、三の丸まで押し入って火を放った。

寺部、梅坪の方面に、突然モクモクと黒煙が立ち登り火の手が上ったのみか、銃声がおびただしく聞え出したので、丸根、鷺津の城兵は、すわこそ一大事と狼狽して寺部梅坪の救援に趣いてしまった。

而し、寺部、梅坪の城を攻め落すのが目的ではなかった家康は、敵の注意を寺部、梅坪に集めて置いて、見事に裏をかくて神迅果敢におびただしい兵糧を、大高城に納め入れることに成功したのであった。

これが十八才の家康の軍略の初めであつたが、「天晴れ末頼もしい大高城兵糧入れ」と、敵も味方にも、若い家康の戦略のうまさを知らせることとなった。

三

永禄三年五月十月、軍備既に整え終えた義元は万善の策を立てると、駿河国の三力国か

ら狩り集めた四万余の大軍を率いて威風堂々と駿府を出発し、先ず鷺津丸根の両城を攻め落せと下知した。

十七日には、義元の本陣は、早くも桶狭間に着陣していた。

十九日、義元の本陣は、鷺津城を囲んで、ここに攻防戦が始まった。

今川勢は人海作戦で、新手を入れ替え入れ替え息も継がせず執拗に攻め立てたので、あえなく城将飯尾近江守始め城兵の大半は討死してしまい、残るものも僅かに身を以って城を逃れ出してしまうほど大敗北を喫してしまつた。

この時、尾州の要害の地である丸根城の攻略を命ぜられた若冠十八才の若大将家康は、松平又七郎家広、松平弥左衛門を正兵とし、松平勘解由康定、松平玄蕃清吉を遊兵とし、石川数馬等を守護とし、酒井忠次、石川家成に軍令を司らしめて丸根城へ押し寄せた。

家康は先ず敵の容子を伺ってみると、城を固く守って防戦すべきはずの城兵が、今にも切つて出ようとするような気負い立った気配がみなぎっていた。これは、必死の一戦を交

えようとする決意であるを見て取つた家康は、彼等の誘いにかかつてみだりに一気にかからぬようあくまで鉄砲を以って挑戦した上、敵の攻撃のゆるむ透間を見て城を乗り取れと命じた。

城將、佐久間大学秀盛は、大高城兵糧入れの時、家康の計略に見事乗せられた怨もあつて、目に物見せてくれてやろうと、旺盛な将士の士気をいやが上にも鼓舞して攪まず矢鉄砲を射かけて来た。このため真先に馳せ進んだ家康の家臣、松平善四郎正親、松平荷右衛門重利等は討死してしまつた。目の前で愛する家臣を打ち取られた家康は、激怒した真赤な顔で高く采配打ち振り、

「今こそ時ぞ、進め者共！ 城にかかれ」と怒号した。

家康の叱咤に、さすがに世に聞えた岡崎党、三河武士の意気の見せどころと、父討たれても子は顧みず、主が討たれても、その假を乗り越え踏み越え猛襲し、城將佐久間大学を討ち取ると、賛掃部氏信先登となつて旗を押し立て家康の総軍、ワツと喚声あげて怒濤のように城中へ殺到して行つた。

この戦の家康の勇戦ぶりには、義元は家康に摩利子天の乗り移り給いしかとまで激賞した程であった。

のみならず、この一戦で家康の用兵の並々ならぬ手腕を知ると、これまで大高城を守らせていた彌殿長助を呼び寄せて、大高城は敵地に挟まれた軍略上重要な城であると云う理由で、彼に替って家康が新たに守護の任に命じた。

家康等の奮戦によって丸根鷲津の要城を手

に入れた今川勢の士気はますます昂って勝ち誇った将士の心は、尾州に入り信長を倒し近江から京に入り天下を掌握する日も遠くはあまるまいと有頂天によるこんでいた。

今川勢の連戦連捷を知ると、近郷の豪族等いずれも今のうちに義元の歎^うを得て置ようと、戦捷を祝しおびただしい酒肴を携えて陸続と本陣の義元を訪れて来た。満悦の義元は、兵を止めもたらされた酒肴で陣中にゴツタ返すような盛大な酒宴を張り将士を犒^{もてな}った。

一方、手勢僅か五千を率いた信長は、鷲津丸根の落城を鳴海表できくと、悲憤の思いをかくして兵を急がせた。

熱田に到着すると、先ず神宮の神前に願文をささげ、ひたすら戦捷を祈った。

信長にとっては、この一戦こそ、食うか食われるかの織田の運を賭けた一戦であり、大敵を相手にしては、或は必勝は期し難いかも知れぬと、心中悲壮なものがあつたのである。

八月二十一日の閣議に愛知文相は昭和

和三十八年度教育白書を提出した。これに依ると、昭和二十五年に三百四十八校（うち短大百九十校）で発足した新制大学は、三十八年には五百九十一校（同三百二十一校）に達し、特に私立大学の増加が著しく、量的に飛躍をとげた。しかし、施設の整備は遅れ、四十一年度からの大学生急増期に対する心配が残されている様である。

暫定的制度として発足したと云う短期大学も、専門職業教育と女子の高等

教育の普及に大いに役立ち、現在ではその価値及び役割を十分に認め、恒久的制度化が具

体化しようとされていることは嬉こばしい。又、日本の科学技術者の不足を補うため理工科系学生の増募を、経済計画の一環として計画的に行われることになったと報じている。

一方、実際には全大学で、志願者の九割を収容し得る現在、特定の大学への志願者集中に依り、入学試験が激化して大量の浪人を生み、高校予備校化の傾向を招いているようである。このため、全国的、共通的テストを中心として、公正で客観的な入学者選抜の方法

の検討が真剣に始められるそうである。

日本育英会奨学金の貸与を受けている学生は総数の六分の一に近いと報告し、大学教育に於ける育英会の果す役割の大きい事を認識させられた。

又、戦後の社会的な激動期に活撥に行われた学生運動は、社会、経済の安定に伴い、次第に衰えを見せて来たが、最近に於ける少数の活動家の政治行動は、むしろ過激の度を加え、不法行為にわたるものが少くないと語っていることは興味深く感ぜられた。

大学白書に関する雑感を二三記して見た。

——表紙の解説——

ミロク菩薩

七世紀 ナーランダ

古代インドの仏教大学の一つナーランダは、玄奘三蔵の大唐西域記などによって日本にも知られています。現存する遺跡は三千を超える学生を収容したと云われる僧房のあと、チャイトヤと呼ばれる本堂、大塔、奉納された数多くの小塔などですが、これら建造物の大きさにもかかわらず、石刻、ストツコウ、ブロンズなどの仏・菩薩の像は比較的少数しか発見されていません。十三世紀のムスリムの破壊は徹底的であつたらしく、この時代にここを通つた僧は、ムスリム軍をさけて森の中にひそんでいたヒンドウの王に面会していますので、壮大な寺院の廊下・僧房のいたる所にまつられていた塑像、彫刻などもこの際、取りこわされてしまったのでしょう。仏像の内で現在数多く残っているのは、八世紀以降のパーラ王朝のブロンズで、ヒンドウの神々も同様に製作されています。

ここにあげたものは七世紀の作と云われる石のミロクの菩薩です。ナーランダは、お隣のヴィクラマシラー寺と共に密教の中心であつたので、観音、ミロク菩薩などの他に、密教の仏たちの像が残っています。大きな耳飾りをつけたふくよかなミロク菩薩の顔は、ガンダーラなどとは異なつたいかにも中インド的な容貌をあらわしています。しかしグプタ朝に到るまで上り坂をたどつて来たインド石刻は、除々に盛んな創造力を失い始め、パーラ王朝以降、南インドのブロンズ像に独特の美しさを保つ以外は、偶像崇拜を禁ずるムスリム文化の下に発達を止められてしまっています。(佐藤良純)

岡 潔 著

「風 蘭」より

○わたしは科学者としてこの十六年、弁栄上人のお教えに基づき理性界の諸川の流れを詳しく調べ、そこに一の矛盾もなく、説明のつかないものもないことに驚歎を禁じえなかつたのです。

○理性界におけるいろいろな流れ、たとえば数学科学教育芸術など、源を尋ねてさかのぼると、どれもみなとちゅうでわからなくなつてしまいます。ここが理性界の終わり、宗教界の始まりです。この理性界の端に立つて望み見た宗教界が無差別智の世界なのです。

○大自然は人の子を生むだけではありません。これを育てます。これがほんとうの教育です。人はその手助けをします。

○人が生れて六十日になりますと、もはや、目を二色に使いわけます。「見える目」と「見る目」です。母の顔を見るときは、「見える目」で見ます。他人の顔を見るときは、「見る目」で見ます。

この「見る目」の主が無明といわれている本能なのです。

○ 深山木の梢に生ふる風蘭の

香り床しみ 文に名づけつ

東北の庶民の心に生きる

来 如 義 定

寺 方 西 山 樂 極 宮城県

宮城県宮城町、極楽山西方寺（浄土宗）の六角の御堂に安置される「定義如来像」は、みちのくの人々の信仰を集め、老若男女の崇敬深き阿弥陀如来の尊像であります。

この尊像は平家と源家の歴史的抗争の物語の中に幾多の喜怒哀楽を秘め、脈々と伝えられて来ました。平家隆盛の世、平重盛が支那欣山寺に、平和を希求する心持を以って黄金若干を寄進したのであった。その篤志に感じた仏照徳光禪師は、重盛のもとに阿弥陀如来の尊像を送献して其の心に応えた。この尊像を受けた重盛は大いに喜び、日夜に礼拝し、天皇国家の安永と平氏一族や自らの身の後生を一心に祈った。遂に重盛死に臨んで、肥後守貞能にその尊像を授け、供養礼拝せんことを托したのであった。

時は移り、義仲の変、一の谷・屋島の戦に平家敗れ、平宗盛檀の浦に滅すると、貞能一度は死を決意したものの遺命を重んじ、常陸に隠れ出家し、肥後入道となって遺托の阿弥陀如来尊像を一心に供養礼拝することにつとめた。次いで忠光、景清等の乱が起り平家残徒の追討の手を源家は強めた。平家残徒肥後

入道東奥の地まで逃れ、名を「定義」と改めて安徳天皇大菩提、主君重盛及び平氏一族の冥福を熱心に、二心なく祈り、日々を過し



（定義如来山門）

た。「我が死後は墳墓の上に小堂を建て、如来の尊像を安置し後世に伝えるよう」と遺言して世を去った。ここに、御堂が建立され、

宝永三年（一七〇〇年）觀連社良念が第一代住職となり、極樂山西方寺が創建せられた。

〔同寺縁起による〕

現今この地を定義（ジョウギ）と称し、日々に参詣の人々が来り、重盛以来の弥陀信仰が東北人に引き継がれ、この定義の里に講中の人々は団体参詣バスを連ねて参詣に集う。これ等信仰の人々の為に定義の地には早くから宿休憩所が営なまれ素朴ながら、信仰の地としての門前町を形づくり、東北の庶民の心の中に阿弥陀如来を強い信仰の紐帯で結び付けている。何時の世も、何処の地においても、民衆の参詣旅行、霊場・札所巡拝旅行には、深い宗教的な信仰心を基盤として、力一杯、身一杯に労働した後の心身の憩の為の役割をいつももみとめることが出来る。全国各地の寺院神社は、古くより民衆の間に於てリクレーションを兼ねた信仰の為の旅行の目標として生き続けているのである。

東北の弥陀信仰の地、定義は北方はるかに奥羽の連峰を眺むる景勝の山狭の地に位置し、常に善男善女の参詣が絶えないが、毎年四月・七月・十月の六・七日を例祭日を定め

各地より信心の人々がこぞって来るのである。今年も七月の六・七の両日には幾多の参詣の人々をあつめて盛大に、にぎにぎしく例



祭が執り行われたのであった。

（定義如来堂）

又、旧正月七日には開山記念祭が毎年営なまれ、開山上人の威徳をしのんでいる。西方

寺には前記「定義如来尊像」の他に、安徳天皇を祠る「天皇塚」や貞能従臣墓標と伝えるところの杉櫨の巨木、貞能所持の木製鞍轡、平氏の軍旗等の什物が秘蔵されて居り、各例祭日には閲覧に供している。

宮城県宮城郡宮城町大倉

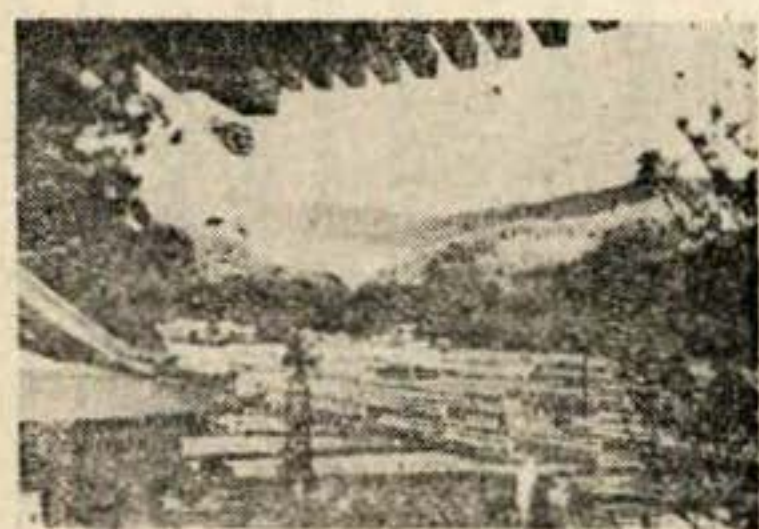
定義・極樂山西方寺

貫主 大江田博瑞僧正

交通——仙山線白沢駅下車 一一・五キロ

白沢駅前発バス定義行

仙台駅前発バス定義行



（はるかに奥羽連峰を眺む）

秀吉と利休

千 利 休

林 左馬衛

(宮内庁図書寮)

利休が死んで、その年のある夜、数奇屋に幽霊が出た。まぎれもなく、利休の怨霊で、黒い宗匠頭巾をかぶり、伊のかたえにじっとしていた。秀吉が早かったか、お相手の女房たちが早かったか、詳らかではないが、氣付いたとき、秀吉は、すでに初炭の点前にさしかかっていた。幽霊は、眼の中から光を放ち、静かに静かに暗い炎の息をはきかけていた。誰を凝視しようとするのでもない。眼は、ひとと、起し炭の、ほっと点りそうになる音にむけられている。

整然と居ならんでいた女房たちの驚きは、いうまでもない。幽霊が、その驚きに無関心であればあるほど、恐怖心がまして、壁沿いに、一人去り、また一人去るようにして、みんないなくなってしまった。

秀吉は、炭を入れ終り、白炭を点じ終って後、形のごとく居前をととのえてから、

「無礼者！」

と、怒鳴った。怒りは心頭に達し、小柄を抜かんばかりの勢である。狭い茶室の中に、一瞬懐惨の色が漂い、秀吉の凝視と利休の凝視がからみ合った。と、いつても、利休は炭以外の何もみていたわけではない。

「不憫な奴……。」

そう、秀吉が思った時、利休の幽霊は、すつとひくようにして、座に戻った。――座は、生前、利休が峙してゆずらなかつた、師範の座である。

秀吉は、道具をひき終るや、香合を握りしめたまま、居間に出て、

「三十郎、三十郎。」

と呼んだ。堀直寄を喚んだのである。個室に帰ることもならず、寄り添うようにして集っ

ている女房たちの顔は、例外なく土色に変じて、いまはみる影もなく、悪い半面を露呈している。それを、ひややかに見やりながら、秀吉は、直寄に、数奇屋にいるわけものを見届けてくるよう、吐き出すようにいつて、奥にひきこもった。

秀吉にしてみれば、不愉快この上ない利休への嫌悪感が、いまなお尾を引いているのであつて、それが、両者の間にあつてすでに清算されていると漸々得心がいった矢先でもあるので、ひとしお、不本意を予儀なくされるのだ。

「くどい！」

そう、秀吉は思う。そのくどさが、自分と利休の間にかけてわたされた縁の深さを物語るしるしであるとしても、怒りがそこにむかつてゆくことを、秀吉は、如何ともなしがたくなっている。

「もうこりこりだ。」

秀吉は、本心から、そう思わずにいられなかつた。

直寄が、戻ってきて、何のけはいもありませんでした、と報告したのは、それから間も

なくのことである。そして、後日、女房たちが、あの時、直寄が、長廊下の窓を念入りに閉めながら茶室にむかつていったことを、秀吉に告げた。

秀吉は、この十五才の少年の武将としての素質に感じ入りながら、その時一つ、拾いものをしたような気持になった。利休を許すという気持と、直寄を認めるという気持が、なにかこれまでに経験したことがないような崇高な精神の中に交錯するのを、思わないわけにはいかなかった。秀吉は——、その夜、茶を断った。

それから、長い年月がたって、世が泰平の江戸時代を謳歌していた頃、上京の或る茶人が、二三人の客を招じて茶事を催している最中、路次の切戸を細目にあけて、菰を冠った乞食が、そなそなと這入ってきた、のであるという。庭を詠め待合のあたりからしきりに囲いの様子を延上り延上りして見ているところを、発見された。

もとより、数寄をもって信条とする人々の集りなのだから、いや物数奇な乞食であることよ、いやいや彼は今こそ乞食なれ以前は相

応のくらしに茶事を好んだ者であろう、姿のきまりがわるくない、等々、ついに乞食を内露地に呼びこんだ。

乞食は、露地の踏付石にうずくまっている。茶を飲むかと問えば、返事はないが、反対しているふうにも思えない。茶を点てて来てすすめると、素直に面桶を取出して、差出すのであった。

「茶に貴賤の隔てはないぞ。直にお飲み。」亭主も客人も、今は総出で、庭の乞食をとりまいている。今日の茶の湯の興は、けだしこれにつきるか、とまで思われた。

乞食は、再参辞退しながら、追いつめられるようにして茶盃を手にしたが、飲む作法までことごとく礼にかなっていると、絶大な讃辞を浴びた。乞食も、今は、打とけたように、棚飾り軸物等を庭からながめながら、感深い様子であった。賞める詞こそ少なかったが、一つ一つの名をいい当て、客人たちの興をそそることひとしおであった。

それから何日かたって、人々は、吉田山のここかしこを求め歩くうち、ふと、これだこれだと皆思い当る場所に到達した。先日、別

れぎわに、私も一服差上げたいと乞食が申し出たのが縁で、今日連立っての散策であった。衆評まちまちながら、乞食になにかひかれる思いがするのが、妙であった。

木立を過ぎて、ふと麓の里がみえてくる場所を見立てて、三本の竹に釣られた栗田焼の大土瓶がみえる。近よってみると、瓦が半ば地に埋められているのが、風炉にみたてられたものであろうか。きれいに洗い去られたふごを茶盃に、作法通りにたたまれた茶巾が添えられ、青竹でけずったばかりの茶盃と茶杓がしくまれている。茶は、これも青竹の引切りに入れられていて、もう点てられることばかりを待つ風情である。客座には、新しい菰が三枚しかれていた。

乞食の姿は見えない。扱は、身を恥じて茶席に出でぬその潔白さよ、と感心して、興に入った折しも、一陣の魔風立って、一天俄にかき曇り、あれよあれよと騒ぐうちに、杉の梢とおぼしきあたりに、天狗と化した彼の乞食が現われ、忿怒の形相ものすごく、

「我は、利休の靈なるぞや、茶を飲むはそれにて足れり、今時の数奇者共は、えしれぬ

古き道具を並べ、干店商人に異ならず。」

と、さんさんに今の茶人の悪癖をいいたてて、痛罵のかぎりをつくし、さて、一陣の魔風と共に消え去った、のである、という。

千の利休の怨霊は、最近では、まず、世上を騒がせるほどの現われ方をしなくなった。ほくとしたところが、このごろは、その気配のかすかな徴候を、それもほんのたまたま目睹するくらいのもので、しかない。

利休は、多くの弟子をもった人であった。そして、多くのすぐれた弟子達の心に生きた人であった。身は禪門の印可を得、参禅悟道の道に仏法を訪ねた一人の修道者であったが、その弟子の中には、日蓮宗の僧も、キリシタンの武家も、真宗の町人も、天台真言の公卿も、各々の求道を続けながら存在していたのであった。

それらの弟子たちも、利休の師や師の友人達さえも、ついに一度も化けて出なかったのに、利休だけが、少くとも史上二回化けて出ることを許されたのは、彼が怨霊と化するこ

とがむしろ正当に望まれるところであり、決してふとどきなことではないということを、あまねく人々の心の中に認められていたからである、という以外

の理由ではない、と思う。

千の利休は、復活して世に現われることを期待された、史上稀な人物の一人であった。その怨霊化の一つの条件は、たしかに、非業の死を遂げたことにある。死すべからずして死を命ぜられた哀しいものに利休が属していたということを知っていた人は、利休自身の外にも何人もいたから、それらの人々の期待までふくめて、半ば必然的な復活を告げたものであったのであろう。しかし、利休の先輩たちの中にも、利休の弟子たちの中にも、非業と呼ばれるべき死を遂げた人は、少なかったのであるし、ことに、利休の弟子たちの場合、あきらかに師の利休以上に悲惨な最後を遂げたものも、幾人もあったのであるから、その条件だけが必要にして十分な条件であったと、認めるわけにはいかない。

非業の死の、一面の原因として、利休に、利休自身の中に、殺しても殺してもあきたらない特異な人間性を認めることができたものは、一人秀吉の外にも、何人も人がいたで

あろうことが、ここでは想定されなければならない、と思う。

それは、何か――。ほくは、そこに、利休の人並みはずれた人なつこさ、をみるのである。今日に残るすべての形式主義茶道の祖でありながら、そうした形式主義的な教養に相反する奇妙な人なつこさを持っていた人が、利休であった。そのことは、利休自身の書簡や、利休百首等の道歌にふれているものにとつて、否定しきれない、利休の真実なのである。

いわば、利休は、極度の形式主義と、極度の非形式主義の間に、二律背反の橋をかけた人であった。それは、安易な眼からみるならば、いかにも矛盾した人間像であっただけに、幾多の誤解の中にさらされなければならぬ宿命を、自分から背負っていた、ことになるのである。

人々は、その利休の矛盾を許さなかった。利休が人を許さぬように、人々も、利休を許さなかった。それは、怨霊として出現することによってのみ理解され得べき、高次元な人間関係にあった、というべきなのであろう。

茨城県仏教青年会

発会に当りて

齊藤 高明

思えば昭和三十七年十月二十八日、主に真

言宗豊山派所屬の青年僧侶有志相集り（於土浦市滝泉寺）、創価学会の極悪非道にして無知、陰謀且恐るべき社会的・政治的進出を憂いその現況を検討すると同時に、青年仏徒の自覚と進路について協議討論の上、

「この会は会員相互の親睦提携を基調として現代社会における仏教の意義並にその立場を確認し暫新的な意欲をもつて現実に即した仏教的社會教化活動を實踐することを目的とする」

との旗印の下、単なるセクシヨナリズムを排して全一仏教的活動を展開せんと決議し、会員三十余名の賛意を得て地味ながらも活動を開始して以来一年有余の歳月を経た訳であるが、今春偶々県仏会長並に事務局より各宗派合同の県仏青結成の提案に接し、早速賛意を表し同志相謀り、各宗派より準備委員を選

出、茲に準備委員会を結成して、県仏青結成に関する諸問題を協議する事三回県仏の協力と準備委員の努力が実り、去る六月三十一日・午後一時・水戸市神崎寺に於て各宗派より新進気鋭の青年僧侶（四十才未満に限定）約七十余名が参集。

讃仏歌「四弘誓願」合唱・開会の辞、続いて経過報告があり、下村清智議長の下、会則——特に目的・事業——についての活発な討議が行なわれ、役員選出に入り、初代会長に渡辺隆栄氏（真言宗豊山派）が選ばれた。

次に「本日茲に我等青年仏徒一同に会して茨城県青年仏教会を結成し、大聖釈尊の教を基調として、仏法を護持し興隆せんとの信念の下、現代社会に即応せる仏教の意義並にその立場を再確認し、積極的且暫新的な意欲を以て現実に即した多面的社會教化活動を實踐する事を宣言する」

との宣言文が力強く朗読され、万場拍手と観喜の裡に茨城県仏青が誕生した。

県仏青誕生と共に茨城仏教同志会が所期の目的を一応達成して發展的解消を行い、会員各位が今後茨城仏青会員の一人として、正法

護持の為不惜身命の情熱を堅持して、仏教的諸活動を展開せんと約したのも当然の帰結であらう。

仏教が種々なる意味に於て危機に遭遇している現在、各宗派合同の全一仏教的活動が要望され乍らそれが至難な今日、更には都道府県単位の各宗派提携による仏青の組織が皆無の現在（この点については、去る六月一日静岡に於て開催された第十二回全日本仏教徒会議の際、青年部会における小生の質問に対する全日仏青事務総長の解答より立証された）茨城県仏青が全国に先駆けて雄々しく誕生した事は重要な意義を持つものである。

本会の真のスタートはこれからである。前途には幾多の難問題が山積している事は事実であるが、会員各位が仏徒としての自覚を深め、相互の親睦提携を基底として仏教愛・仏法宣布の大悲願の下団結し目的に即応せる力強い活動を實踐する事が最も肝要な事である。今回幸いにも多年全一仏教的活動を念願され企画性と実行力に富む渡辺氏が本会の会長に選出された事は本会発展の為に期待するところ大である。（元茨城仏教同志会々長）

学会突然変異した

— 衆議院進出 —

已に学会は、六月集計では、四百九十余万世帯という数になった。いつも言うように、この数字を、そのまま認める必要はないが、何としても恐ろしい数字である。

しかし、その数字より、何としてもおかしい話は、突然変異して、衆議院に出ると言い出した事である。前から、その動きを見ている者からすれば、何も今更、彼等が衆議院に出ると言ったからと言って、驚きはしないのである。已にそうした行動は、前から予想されていたからである。バケの皮を何時までかぶっているかが、むしろ見ものであったのである。そして、驚いたのは、今までその事を知らされていなかった信者達でなかったろうか。

表面的には、学会幹部連は、衆議院には出ないと言っていた。戸田前会長も言っていたし、池田現会長も言っていた。現に、五月三日の総会席上でも、池田会長自ら次のように言っている。

私は巻頭言で、「われわれは政党ではない。すなわち創価学会は政党ではない。したがって衆議院にコマを進めるものではな

い。あくまでも参議院、地方議会、政党色があつてはならない分野に議員を送るものである」という意味の一項目を書いておきました。

と言っている。そう言った舌の先がかわかぬ中に、政党を結成し、衆議院に出るとは、一体何の理由があつてなのであろうか。池田会長はいう。

王仏冥合達成のために、また時代の要求、民衆の要望に応えて、政党にするのもよし、このようにしたいと思ひますけれども、いかがでございますか。

この後、聖教新聞によれば、大拍手が起つたとしてある。この大拍手を聞いた池田会長は、

全員の賛同を得ましたので、これをもって決定いたします。

こんな具合で、学会は突然変異してしまつたのである。全く馬鹿々々しい芝居にも程があるが、この変身の早さにも驚く外はない。拍手は学会の常套の手段である。烏合の衆は、いつでも拍手する。右を向けと言えば右を向き、左を向けと言えば左を向く。その会

員が大拍手したからだと言って、これを「民衆」の賛同を得たとは、何と言う思い上った考えであろうか。何処に「時代の要求」があると言うのであろうか。しかも、一言の会員の発言もさせず、一言の討論も無しに、この様な大変更をする事自体、無茶であり、学会の独裁制を露呈したもののという外ない。

学会に潮という雑誌がある。これも、今までバケの皮をかぶっていた。

あたかも大衆雑誌のような顔をして店頭にならんでいた。ところが、衆議院進出を決定したとたん、この雑誌も変異してしまった。たちまち学会の宣伝誌として、活躍し始めたのである。この中で各界の名士の声が入れられているが、公平に見る評論家は、この突然変異ぶりを一様に疑問視している。

唐島基智三氏（政治評論家）はいう。

ただ、なぜ出さないといって、急に出したのか、とつびの感であって、どうして今まで出さないといったのを突然、衆議院にうって出るのか、その点十分な理由を知りた

い。

藤原弘達氏（政治評論家）もいう。

ただ問題は、いままで「衆議院には出ない」といつていたが、下からの要望でというだ



（議会の公明会議員）

けでは、説得力に乏しいように思う。

すべてこれらの意見は一致している。どうしてもこの突然変異が理解出来ないのである。学会員の中でも、面真目に考えると、ウソをつかれていたと思っっているに違いない。

一番おそろしい事は、こうした突然変異が時々平然と行われる危険があるという事である。王仏冥合という事自体が、全国民を学会の信者にして、国会の議決によって、大石寺に戒壇を建てようとする革命的意図を持っているものである。こうした意図を持つ学会が、万が一そんなこともあるまいが——政治権力を持ち、衆議院で過半数を取った時は何をし出すか分ったものでない。独裁制を取り、宗教を学会に統一し、正にヒットラーの再現をやり兼ねないではないか。

日本人も、まさかそこまで許すほどの馬鹿ではないと思うのだが、現在においてさえ、政界にも、宗教界にも、さほどの驚きもなく、何の対策も無いところを見ると、そうした危険が来ることを、ただ見守っているだけなのであろうか。もう少し、われわれは現実を直視しなければならぬ。そして、果して、彼等が最終的に何を意図しているかを、もっと見極めて、これへの対策をせねばならない。

ここに、政界、宗教界の識者の方々へ警鐘を再び乱打する。

続三部経の再発見(終)

須藤 隆 仙

(函館・称名寺執事)

内証の師資相承

師資相承の問題になるとこれまた陋劣ろうれつであります。曇鸞とうらんから道綽まで八十年も開きがあるといい、善導から源信、そして法然と、時の隔たりが相当であるとして、「インド仏教では師資相統を重要視し、禪宗や真言宗などは永くその風を守った。浄土教だけはこの点でも仏教の中の異端である」といつているのであります。それはあたかも浄土教だけは血脈がないから仏教の正統ではない、といわんばかりであって、意地悪く、陰險な態度であります。

ここでも渡辺氏は仏徒でなく、外道の学者になり下っております。師資相承ということは、必ずしも面談(師と弟子が直接会って伝授伝法していく)だけをいうものではありません。内証ないしやうといって、師と弟子が会っていないくとも、またその間に時代的な隔りがあっても、内に感証して法を相承していく方法もあるのであって、浄土宗はその内証の立場ですから、善導大師から法然上人へは夢中の相承が語られているわけであります。そしてそのことはただ徒らに師と面接すればそれでよいという形式だけのものではなく、内証という宗教的意義によって、本質的に躍動した、生き生きとした法門が伝えられていくわけです。形だけ整えばよいというのが師資相承の本義ではありません。ですからこの点については、日

蓮聖人でさえも浄土宗の立場に賛同して、渡辺氏のような愚言を吐いてはおりません。法華宗内証仏法血脈に「今列ぬる所の血脈相承の次第は、内証の次第を列ぬ。何ぞ難を致さんや。内証を以って本となす事は当家に限らず、他家にも例あり。いわゆる天台、禪宗、浄土宗等の師資相承も必ず所離の如くならず。皆悉く内証を以って本となすなり」といっているのです。このような内証による血脈相承を知らぬ渡辺氏が、「浄土教は仏教の異端である」などというのですから、全く話になりません。

とるに足らぬ異論

以上のほか渡辺氏はずいぶん幼稚なことを部分的に発言しております。その一々を上げる紙数がありませんが、たとえば念仏はインドでは「仏を思う」だけの意味だったのが、シナにきて訳されてから「仏の名を唱える」という中国の意味に解釈され、そこから東アジアの唱名念仏が発達したのである、と、いっているのです。これもさきのベリリング方式で甚だ傑作であります。念仏経（浄土経）はインド以外の土地で作られたもので、インド本来のものでないというのが氏の主張であります。そのために大法論に書いたりしたわけであり、と。ところがここでは念仏がインドから訳されたこと、と、いって、浄土教がインド本来のものであることを認め

てしまっているのです。全く困った博士さんであります。そしてまた「汝よくこの語を持て、この語を持つとは、即ちこれ無量寿仏の名を持つなり」とか「念仏するにいとまあらず、善友つげて言わく、汝もし念ずることあたわずば、まさに無量寿仏と称すべし……十念を具足して南無阿彌陀仏と称す」（観経）、などとあってすでに經典に念と称名が区別されていることも、渡辺氏は知らないのでありましょう。

月輪博士の教示では、梵文法華経普門品の偈にある「世自在王が導師である法蔵比丘は、世間から供養され」とか「立って無量光導師をかように左右から煽いで」などの文を、渡辺氏は、「世自在王導師である比丘法蔵は世間の供養を受けて」としか読めないし、「右と左とに立って無量光導師を扇ぎつつ」であるが、誰が右と左に立っているのかその文脈が明らかではない」などと誤読しており、月輪博士は「この暴言を読んで大いに驚いた」（中外）と、いっておられます。

真言の大徳はミダ信仰

とにかく、以上のような次第で、渡辺博士の説は至るところ矛盾や間違いがあり、ミダ信仰は仏教本来のものに非ず、三部経はインド以外の地で作られた、などといっても全く問題にならないのであります。

經典の成立ということも、釈尊滅後二百年くらいしてから

筆録のものが作られていったということで、それまでは口から口へと、語り伝えられていたもののようにあります。すると筆録經典、つまりふつう我々が經典と呼んでいるものは、釈尊からかなり離れた時代に形作られたもので、それがいわゆる成立ということですが、口授していった末流の弟子が製作するわけですから、その弟子が東アジア地方や、またインドを抜け出した南方に移って、そこで製作しても、なんら不思議はありません。したがって經典の製作地がどこであつても、そんなことは仏教信仰になんの関係もないことであります。それを渡辺博士は、いかにも製作地が大問題のことであるかの如くに耀動しているのであります。一般の人は經典の成立というところ、すぐ釈尊在世の說法に想倒するようであり、しかしこれは実は釈尊在世の說法と関係あることではないのであります。この点を仏教徒はよく認識しておく必要があると思うのであります。何世紀頃何經典ができたという學説は、あくまでも釈尊在世の說法時と無関係なのであります。

渡辺氏は真言の僧籍にある方ですが、真言の高僧でミダ信仰に生きた方がたくさんあることは少しでも仏教史を学んだ人なら知るところでありましょう。今は亡き真言の學匠神林隆淨先生は『密教の淨土往生思想』という論文（仏教論考・

所収）の冒頭に「往生極樂の思想は、大乘仏教の通念である」といい、「竜樹大士が難行道と易行道との別を明示して以來、殊に末法相應の教として、大乘仏教の修行者は、相競うて安樂淨土に往生せんことを期するに至った」といって、仏教の正しい歩みを明かし、「真言宗に於ては……大多數の先徳學匠は、矢張安養淨土往生を望むものが多數を占めて居る」と學説しておられます。してみれば渡辺氏は真言宗徒としても新奇な異端な、真言信仰本来の方ではない、いわゆる外道的なお方のようであります。

正しい仏説として

これまで述べたところは個人攻撃をしているものではありません。私は渡辺博士になんの怨みもありません。攻撃する何等の必要もないのであります。

ただ淨土三部經の正しさを頂くものにとって、その異説に對する、当方の信解を明すべく、筆を運んだものであつて、渡辺氏が三部經をさまざまに異説するから、たまたま氏に論鋒がいつているわけですが、私としてはむしろ自分へいい聞かせることが主なのであります。

かくて縷々述べてきた如く、三部經は、正しい仏説として、南無阿彌陀仏されてまいるのであります。合掌

（引用文中の傍点はすべて筆者つける）

編集後記

▽地震だ、水害だ、この頃
ひんぱんである。天災であ
るが人災とも言えるだけ
に、もう少し心をひきしめ
たい。しかし創価学会では
信者にならぬ者が害を受け
るのだと宣伝している。い
かにも邪教だとわかる。
▽佐藤良智先生御夫妻が欧
米旅行に八月九日出発され
た。社会福祉と児童教育と
宗教事情の調査研究である
大きな成果を期待したい。
▽現代仏教芸術院展覧会が
八月十五日から一週間ひら
かれた。清水六兵衛・樋口
富麻呂等三十余氏の作品が
出品され盛会であった。こ
うした事によって、仏教興
隆がはたらきかけられるこ
とは、この上なくよい事だ
ある。大いに発展を期待し
たい。

が、御同人共、近衛政経尼
の御学友とか。筆を感謝
したい。随想欄はなかなか
好評であるが、読者の方も
投稿頂き度い。四百字詰二
枚でよろしい。
▽大正大学の夏期実践仏教
は、祖山で行われることに
なり、九月一日より一週間
七十人が参加して修行す
る。此の中には女性が五人
もいて、如法に実践するこ
ととなった。
▽王仏冥合の推進力となる
若き創価学会員育成のため
に「假称」「前編学会大学」
を設立すると池田大作会長
が言明。今後の動きに細心
の注意を払う必要がある。
▽七月三十一日米國ジョイ
ンジャー7号は月面のク
ローブ・アップ撮影に成功
し、翌日にはその写真が発
表された。その様な話しの
代表選手であった「月世界
旅行」も又一步近づいた。
「世界もせまくなった」と

は星編集同人の口ぐせであ
るが、近い将来には「宇宙
もせまくなったもの」と改
められることであらう。
▽口ぐせと云えば、星編集
同人は「ハッスル」を連発
し、連日の猛勢にもめげず
自分も大いにハッスルし、
四に東にニボルギッシュに
活動している。「浄土」の
今後のためにも大いにがん
ばってもらいます。
▽前編陸仙氏の力論「純三
部経の再発見」は九月号を
もって終結となりました。
皆様方の御意見もどうぞお
寄せ下さい。期待致して居
ります。
▽此度、池田湛泉氏の「家
康と登壇天室」の連載が新
しく始まりました。来号も
是非御期待下さい。
▽表紙の写真には月号佐藤
良純氏より貴重な写真を頂
いて居ります。解説と共に
氏の御尽力に感謝致して居
ります。

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土

九月号

昭和十年五月廿日

第三編購読可

昭和三十九年八月廿五日 印刷

昭和三十九年九月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

発行所 法然上人顕仰会

東京都千代田区根田町一ノ廿二

電話東京二六二二五九四四番
郵便東京八二一八七番

宗教科教育の好テキスト

マレット著

竹中信常訳

A5版
定価 二五〇〇円
価 一八五〇円

(但し都内は五〇円)

宗教と呪術

——比較宗教学入門——

人間存在の根底に横たわる「宗教と呪術」の問題を解明し、宗教の真実の在り方を鮮明した宗教学の名著を、訳者十数年の刻身のほん訳。

東京都文京区大塚窪町二四

発行所 誠信書房

振・東京・一〇二九五

日本一の生産・設備

梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響 理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事 芸術院賞受賞 香取正彦先生



鋳物師 老子次右衛門

株式会社 老子製作所

富山県高岡市横田 電話 (2) 0258. 1341